

金沢市内の中高校生への意識調査と実用英語技能検定結果に基づく 学力調査からみた小学校英語導入の意義と課題

An Investigation into How English Ability Progresses after Primary School English Education in Kanazawa, Japan

– Research Based on Attitude and Ability Questionnaires
and Results of a Japanese Standardized English Test, STEP –

米田 佐紀子*¹ リンチ・ギャビン*² ウッズ・クレイグ*³

Abstract

This research is based on questionnaires given to about 1900 junior and senior high school students in Kanazawa, Japan, and data available from a national English testing center, STEP. The aim was to investigate how English ability progresses after primary school English education, i.e. to show how the English education methodology and curricula at primary school level can affect Japanese students' future ability and attitude toward English.

The results showed that primary school English affects ability at secondary level, improving test results overall. Students with primary school English passed a level of STEP Eiken, an English test, earlier than those without such education.

This research led to greater understanding of the effect of primary school English in the secondary level education in terms of academic achievement and attitude toward English as well as how implementing English education in public schools affects the society as a whole.

Keywords : Meaning of Primary School English, Feelings toward English at Secondary Level,
Extrinsic Factors in L2, Government Curriculum

要旨

本研究の目的は、小学校英語によって中等教育段階での英語学習に対する意識や英語力にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。金沢市内の私立・公立の中高校生約 1900 名にアンケートによる意識調査（取得検定級調査含む）を行った。また学力調査には日本英語検定協会の実用英語技能検定試験結果を使用した。

その結果、中学生にとって受験・教科など外的動機付けの要因が大きいことが分かった。同時に、小学校英語導入が社会全体に影響を与え、学力向上につながったことが示された。これらは、制度や教育体制を整えて行くことの重要性を示唆している。

キーワード : 小学校英語の意義 / 中高生の意識・学力調査 / 外的動機付け（制度）

*¹ Sakiko YONEDA
北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
児童英語教育

*² Gavin LYNCH
北陸学院大学 コミュニティ文化学科
スピーチコミュニケーション

*³ Craig WOODS
Monash University, Australia (大学院生)

1. はじめに：課題設定の理由

この研究は、科学研究費補助金基盤研究C課題番号 19520537「小学校英語教育で培われる英語力についての研究—国際的評価基準を用いて—」の一部である。また、この論文は第39回中部英語教育学会静岡大会で口頭発表した「小学校英語教育がもたらした中高生英語力への影響と課題—金沢市内中高生へのアンケート調査と実用英語技能検定結果に基づく研究—」（米田、リンチ、ウッズ 2009）に加筆訂正したものである。

本研究の目的は、小学校英語によって中等教育段階での英語学習に対する意識や英語力にどのような影響を与えるのかを明らかにすることである。

中等教育時代の学習の様相を明らかにすることで、小学校から大学まで鳥瞰することができ、また、小学校英語が「英語が使える日本人」の育成に貢献するのか否か、言い換えれば、小学校英語導入の意義を明らかにすることができるだろう。

本研究では小学校での「英語活動」も「英語教育」も「小学校英語」として扱っていく。

「英語活動」は教科ではなく、評価もない。一方、英語の音声やフレーズ・場面を扱っており、『英語ノート』（文部科学省 2009）や『小学校外国語活動研修ガイドブック』（文部科学省 2009）では、英語教育の学習内容と重なっており、メディア等でも「英語（外国語）活動」を「何らかの英語教育」として扱っている（産経ニュース 2009）。「英語活動」と「英語教育」の違いは一般の人には分かりにくい証拠と言える。そこで、本論文では「小学校英語」として扱うこととする。

本論文では、研究の背景・先行研究について述べた後、金沢市内の中高生に実施した小学校英語に関するアンケート結果と、客観的学力調査結果として用いた実用英語技能検定（日本英語検定協会 2007c）（以下 STEP 英検と略）の分析と検討を行い、最後に成果と課題を述べる。

2. 小学校英語を取り巻く背景

文部科学省は 2002 年に「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を発表し、2008 年には 97.1% の公立学校で「英語活動」が実施されている（文部科学省 2008）。今回の研究対象地域

である金沢市では 1996 年から「英語活動」が入り、2004 年には教科になった（金沢市教育委員会 2004）。

今までの小学校英語が体系的な英語教育ではなく「fun 中心なもの」（菅 2008、バトラー 2005、樋口 1999）であったが、この十数年の間に「fun 中心」の小学校英語は何をもたらしたのだろうか。

2011 年からは新学習指導要領で、小学校 5・6 年生段階で「外国語活動」が導入されることになり、『英語ノート』も配布される。実質「英語教育」が正式に始まるともとれる歴史的出来事である。

3. 先行研究

3.1. 小学校 6 年間で培える英語力の調査：

ケンブリッジ英検を使用して

我々が実践研究を行っている北陸学院小学校では、1 年生から 6 年生まで四技能のバランスを重視した教育をしている。自分たちの教育成果を客観的に測定するため、ケンブリッジ英検のヤングラーナーズ（CYLE）の Starters を使用している。

表 1 CEFR、各種英検相対表

CEFR	Cambridge	TOEIC	STEP
C2 Operational Proficiency	CPE	990+	1
C1Mastery	CAE	810-890	
B2 Vantage	FCE	520-730	Pre-1
B1 Threshold	PET	310-450	~2
A2 Waystage	KET/Flyers	220+	~Pre-2
A1 Breakthrough	Movers		4~3
	Starters		5~4

ケンブリッジ英検は University of Cambridge ESOL Examinations（Cambridge ESOL）によって作られている。子どもの四技能を子ども用に作られたテストで測定できること、世界共通の尺度（「ヨーロッパ共通参照枠」Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment（2006）以下 CEFR と略）に準拠しているため、世界的に英語を使って活躍できる日本人を育成するという目的に合致している。また、子ども用と大人用のテストに連続性があるので、1 つの尺度で子供から大人まで測定で

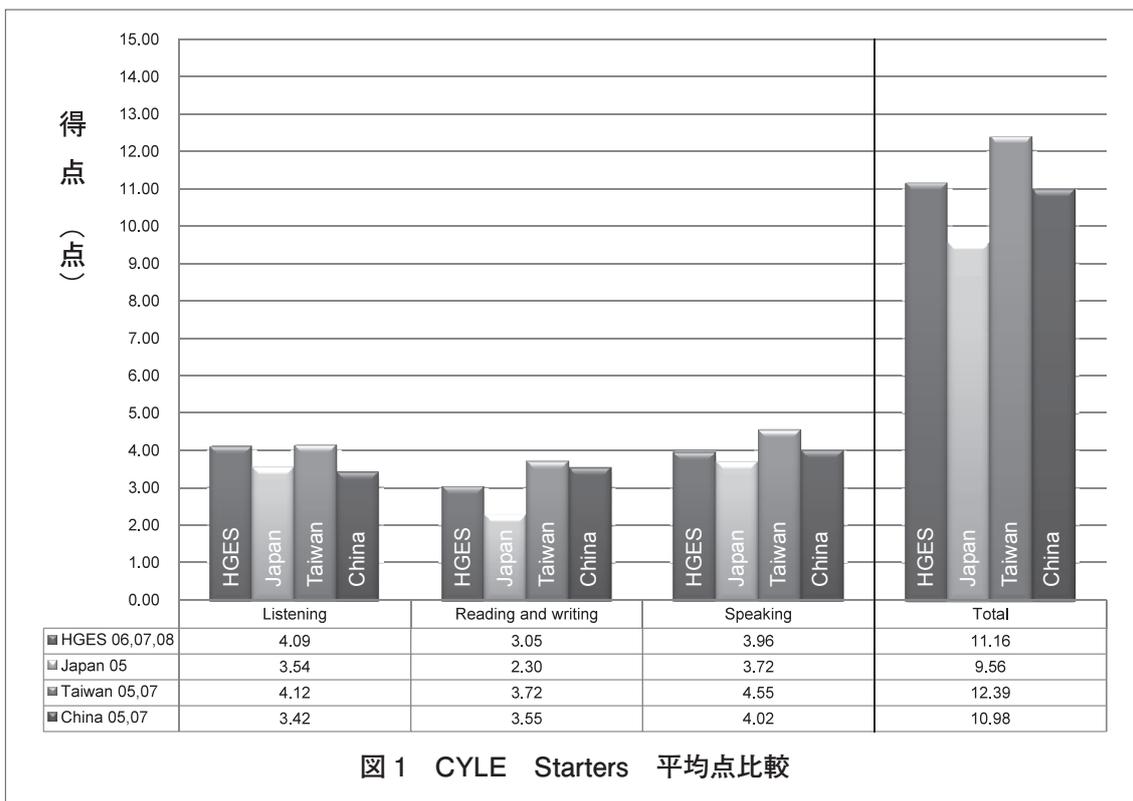


図1 CYCLE Starters 平均点比較

きるといふ利点がある。表1は本テストとSTEP英検、TOEIC、CEFRの相対表である。表1で「Cambridge」と示されているのがケンブリッジ英検である。ヤングラーナーズは表の下位3種である。この比較表については機関によって多少異なり、あくまで「目安」と考える必要がある。

我々の研究では小学6年生にStartersを実施している（米田他2006; Yoneda & Lynch 2007; Yoneda, Lynch & Woods 2009）。Startersは英検の4～5級相当レベルである。

図1は2006年度～2008年度の本学児童（HGES）の平均点を日本人、台湾、中国の平均点と比較したものである（Cambridge ESOL 2004, 2005, 2007b）。

図1は左からlistening, reading/writing, speaking、そして合計点の順で示されている。各セクションは5点で、3セクション合計が満点15点となる。10点を出すと1つ上のレベルのMoversを狙える学力が付いている目安とされている。

HGESの平均点11.16点は、日本人平均(9.56点)と中国の(10.98点)は上回るものの台湾(12.39点)の平均と比べると低い。Cambridge ESOLのExam Reportによると、Starters受験者平均年齢は9.5歳(2004)、9.6歳(2005)、9.0歳(2007)で

ある。本学児童の英語力は世界的に見ると2～3年遅れていることが示されている。

3.2. 長期的意義から見た小学校英語：大学生へのアンケートとTOEICの相関研究より

小学校6年生での到達度が測れても、大人になった時に英語が使えるければ、本来の小学校英語の導入の意味がない。そこで、筆者らは、長期的に小学校英語が有意義か否かについて、筆者らの勤務先の約250名の大学生（短大生）を対象に、小学校英語経験の有無の相関があるかどうか、また小学校英語についてどのように感じているか、アンケートによる意識調査とTOEICの点数を用いて調べた（Yoneda, Lynch, & Woods 2009）。結果は次の通りであった。

- ①四技能の指導を受けた学生は、「fun中心」の指導を受けた学生より、有益性を感じると回答した。
- ②TOEIC得点による学力は、小学校時代の英語経験者が高かった（塾での学習を含める）。
- ③小学校における英語について6割の学生が「有意義とは感じない」と回答した。
- ④一番有意義だと感じる学校レベルは、中学校という回答が最多だった。

3.1 および3.2の先行研究から、小学校英語での四技能に重点を置いた指導は、長期的に有益感が高く、学力についても高くなる傾向があると示された。一方、小学校卒業時から、中学、高校、大学の成長の過程の把握、つまり、学習者の英語に対する姿勢と同時に学力の調査がなければ小学校英語の意義を明確にできないということが分かった。

4. データ収集方法

本研究では、中高生の小学校英語を含め彼らの現在の英語に対する意識と客観的学力のデータ両方を得るために、記述式アンケート（検定取得状況調査を含む意識調査）および実用英語技能検定試験（STEP 英検）を用いた。

アンケートは、Oxford (1990)を参考に、中学生・高校生用に自分達で作成した。

協力校は金沢市内の私立・公立の4中学校と3高校である。実施は協力校の教師に依頼した。教師間によるばらつきを避けるため、マニュアルを添付し、実施者には事前に対面で説明を行った。実施期間は2007年9月～11月である。

学力調査については、実用英語技能検定（STEP 英検）に基づいて行った。回答者の8割が受験していることがアンケートから判明したからである。

STEP 英検の金沢市のデータ1995年～2007年度の12年間分、受験者数・合格者数（5～19歳について309,128人）を入手し受験者数・合格者数を見た（日本英語検定協会2007c）。一方、18歳以下の人口の増減との関係が重要なので、人口統計（金沢市都市政策局調査統計室1995-2007）との相関で合格者増減の分析を行った。

この12年間は、金沢市が1996年度に「英語活動」、2004年度に小学校英語を必修にした時期を含んでおり、また、研究対象者である中高生はこの時期に小学生時代を過ごしている。小学校英語がいかに中高生に影響しているかを明らかにできる期間と言える。

5. 結果と考察

5.1. アンケートによる意識調査の結果と考察

この節では、アンケートにより、中等教育段階

にある生徒たちが自分たちの受けた小学校英語をどのように評価しているのか、アンケート結果を述べ考察を行う。生徒たちは必ずしも教師や研究者のような観点で授業を捉えていないため、生徒たちが質問の意図を理解し回答できるよう、実施者に対応用マニュアルを配布した。

5.1.1. 回答者の概要

回答者数は金沢市内の私立・公立に在籍する1884人である。

回答者の年齢の内訳は12～18歳、平均年齢は14.45歳であった。中学生が1210名、高校生672名、不明2名であった。男女比は、43%が男子、56%が女子であった。

回答者全体の約83%の生徒が金沢市内の小学校出身者、高校生の90%が金沢市内の中学校出身者であることから、金沢市という特定の地域における小学校英語の全体像を探るという目的に合致した回答者と言える。

5.1.2. 小学校英語で習った主な項目と四技能別割合

回答者たちが受けた、金沢市内の「英語活動」は、funを中心とした活動であった（金沢市教育委員会2004）。金沢市は1996年から「英語活動」、2004年から教科の「英語」を始めた。回答者（12歳～18歳）は、全員1996年～2006年までの間にこれらの小学校英語に触れている。

小学校で習った主な項目と割合について、生徒は何をどのように習ったと考えているのか選択形式で質問を行った。図2が小学校英語で習った主な項目と割合である。四技能ごとに、左からアルファベット、ボキャブラリー、センテンス、フォニックス、グラマーの順番に百分率で示されている。

この結果から以下のことが分かる。

- ①アルファベットとボキャブラリーに、授業のねらいがあり、四技能で教えられている。
- ②センテンスは、主にオーラルで教えられていて、読み書きは少ない。
- ③グラマーは、オーラル中心で指導された。ゲームなどに必要なチャンクやフレーズで指導されたと考えられる。

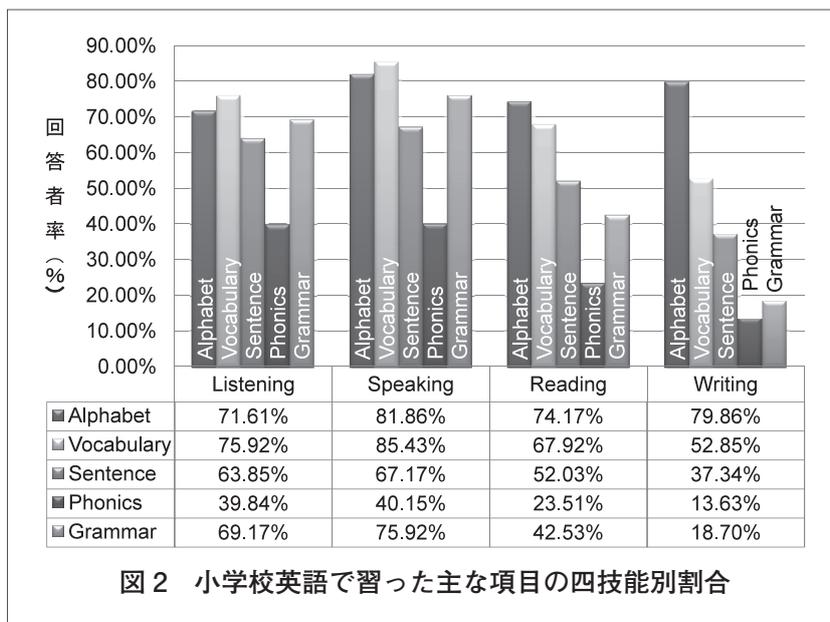


図2 小学校英語で習った主な項目の四技能別割合

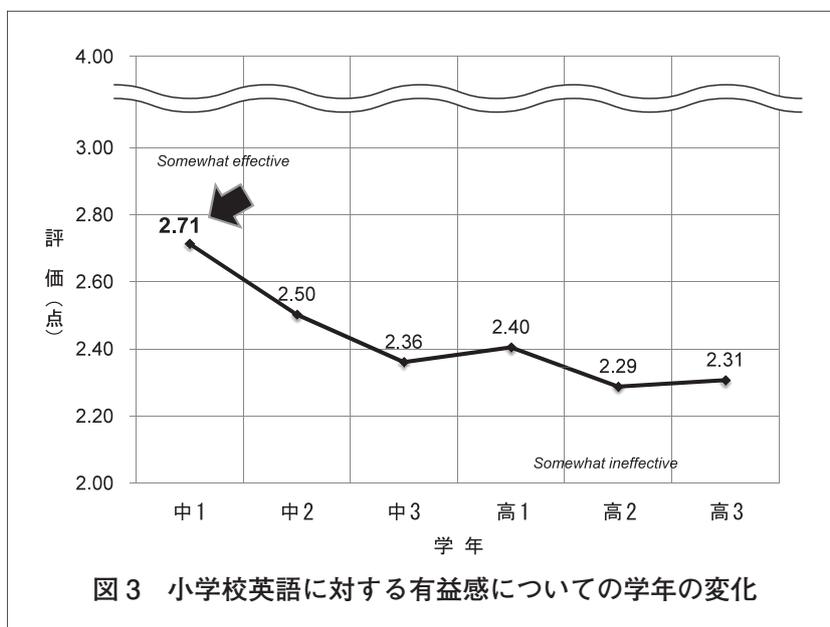


図3 小学校英語に対する有益感についての学年の変化

④フォニックスは、本来、文字と音のつながりのルールによりリーディングスキルの向上を目的としているが、リーディング指導は2割程度となっている。

5.1.3. 小学校英語に対する有益感について

「fun 中心」の小学校英語について、3.2. に示した大学生対象の先行研究 (Yoneda, Lynch, & Woods 2009) では肯定的解答が 40.85% があったのに対し、今回の中高生の調査では 50.44% が肯定的に捉えているという異なる結果が出た。

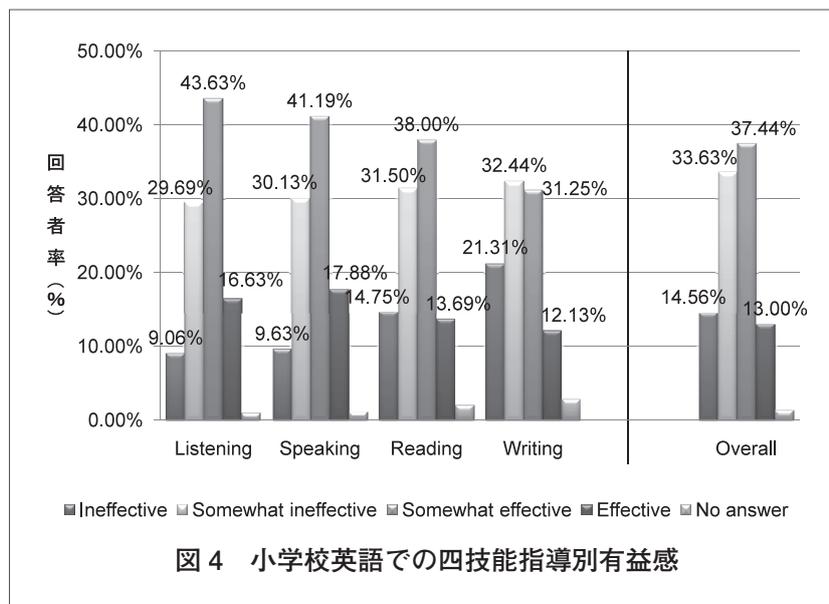
この結果の差異の理由を解明するため、学年別

に分析を行った。図3がその結果である。

中1 (2.7) を最高に下降し始め、中3～高3は2.3 周辺を横ばいになっている。先行研究における、大学生の肯定感が低かった結果と一致している。

この要因について筆者は次のように考察する。

- ①子どもたちは、早期から楽しい (fun) 英語をすると「英語上達 = 良い点数」につながるという幻想を抱いた (産経ニュース 2009、バトラー 2005) が、実は「英語も他教科と同じ勉強 (努力) が必要」と中学校以降に気づくのではないか。
- ②「fun 中心の小学校英語」と「勉強が必要な中学校以上の英語」という捉え方の違いの裏には



指導法や授業のねらいのギャップがあるのではないか。

次の図4はこの②を裏付ける結果を示している。横軸は四技能と「全体」、縦軸はそれらに対する中高生の有益感の率を百分率で示している。リスニングからライティングにかけて感想が否定的になっている。

読み書きに対する有益感が低いのは、小学校での授業に読み・書きの活動が少なかったというアンケート結果と一致しており、小学校授業で行なわれなかった活動について、有益感を持たないのは当然なことと考える。

この結果は、学校教育の影響の大きさを示す指標であるとともに、今後の指導について大きな示唆を与えている。

5.1.4. 小学校英語がもたらす中高生の英語力に対する自信への影響

小学校英語を受けたことが「現在の英語に対する自信」につながっているかという問いに対し、肯定的な回答をしたのは約30%だった。

この問いは、英語だけに言える事なのだろうか。今後他の教科との違いがあるかどうかを調査する必要がある。

5.1.5. 中高生の「自分の現在の英語力」に対する自己評価

この節では、中高生が「自分の現在の英語力」をどう見ているのかについて述べる。productive skills（産出言語能力）であるスピーキングとライティングでは約6割が「授業の半分もできていない」と感じていることが示され、receptive skills（受容言語能力）のリスニングとリーディングでは約6割が「半分以上理解できている」と感じている。この「半分」というのは、あくまでも本人たちが感じている自己評価である。

母語であっても受容言語能力の方が産出言語能力を上回るのは当然である（Richards & Schmidt 2002）。一方、この結果は、生徒たちが授業について「自分は半分もスピーキングが出来ない」と自己評価をしているという事であり、この事は今後の指導に示唆を与えている。

5.1.6. 自己評価と小学校英語についての関連テスト：t-test を使って

小学校英語の経験の有無と自己評価に相関があるかを調べた。小学校英語経験者は892人、未経験者は194人であった。方法はt-testを用いた。

結果は、小学校英語経験者が $M = 0.56$, $SD = 0.22$ 、小学校英語未経験者が $M = 0.46$, $SD = 0.21$ で、 $t(1084) = 5.92$, $p < 0.001$ となり、99.9%の確率で小学校英語経験者の方が自信を持つ確率が高くなることが示された。

5.1.7. 英語学習の目的

英語学習の目的を尋ねた項目では、受験科目だから (62.01%)、学校の教科だから (50.69%)、将来の仕事に必要 (50.27%) などの外的動機付けが、異文化交流 (32.68%) や英語そのものが好き (16.26%) という内的動機付けよりも大きかった。

5.2. 学力調査： アンケートによる取得検定級およびSTEP英検結果と考察

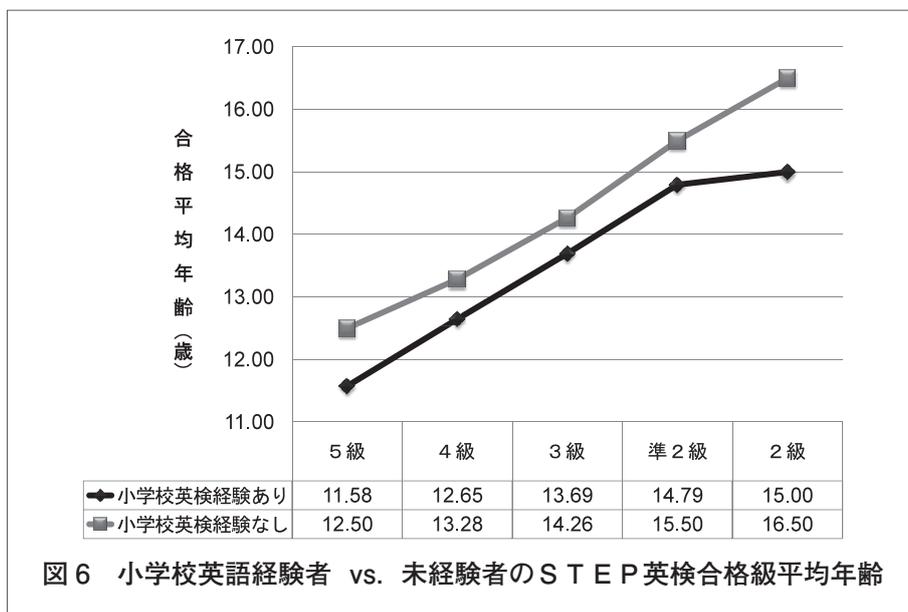
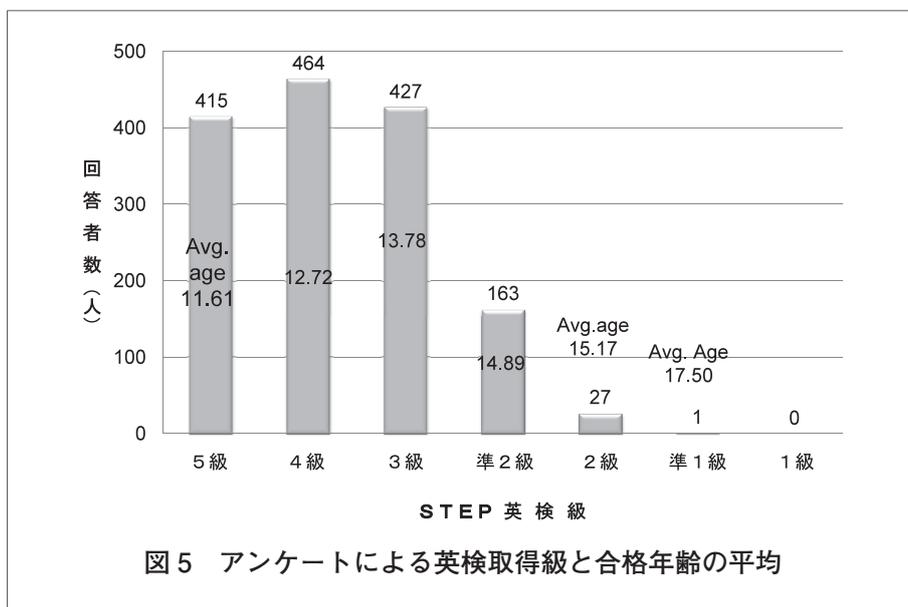
5.2.1. アンケートによるSTEP英検取得級に関するデータと分析

文部科学省は中学校卒業時に準2級、高校卒業時に準2級～2級という目標数値を挙げている

(文部科学省 2002)。日本国内ではSTEP英検が受験や就職に有利に働く。今回の調査でも、のべ1497名(約80%)の回答者がSTEP英検の何らかの級を持っている。図5はアンケートに基づくSTEP英検取得級と合格平均年齢を示したものである。

図5の横軸はSTEP英検の級、縦軸は人数で、Avg. ageと書いてあるのは、合格平均年齢(単位: 歳)である。3級までの合格者人数が多く、準2級から下がる。考えられる理由は以下の通りである。

- ① 2009年度のSTEP英検合格率は、5級83.2%、4級72.2%、3級57.3%、準2級37.3%、2級28.9%、準1級は15.4%である(日本英語検定



協会 2007a)。準2級が1つの壁になることが分かる。

②金沢市では英検を持っていると高校入試に有利になる。学校・生徒ともに取得に向けて努力する。比して大学入試では有益性は高校入試ほどない。難度と有益性の低さが相まって低い数値に表れているのではないかと考えられる。

次に、小学校英語経験者と未経験者で合格する平均年齢に差異があるかどうかを調べた。

図6の2本の線の下濃い線が経験者である。経験者・未経験者の2本の線がずっと並行であることから、小学校英語の経験者は未経験者に比べて、より早くより高い級を取得する傾向があることが分かる。ここから、小学校英語は長期的に学力面で有益であるようだとと言える。あくまで自己申告によるものなので、今後客観的調査をしていく必要がある。

5.2.2. STEP 英検データによる英検取得級の分析

前節の結果は回答者の主観的アンケートに基づく結果と考察であり客観性に欠ける。そこで、実用英語技能検定協会から金沢市のデータを入手し、分析した（日本英語検定協会 2007c）。

時期は金沢市で英語が導入される直前の1995年から2007年度の12年分のデータである。なお、日本英語検定協会提供資料は5歳ごとに区切っているため、小学校入学時の6歳から高校卒業時の18歳に近い、5歳～19歳のデータで分析した。金沢市の人口統計によれば、研究対象とな

る12年間で5歳～19歳で約7万9千人が6万4千人に、高等学校レベルに相当する15歳～18歳では約3万人から2万1千人に減っている（金沢市都市政策局 調査統計室 「統計データ年齢別人口」1995-2007）。

表2は、金沢市内小学校に英語が導入される直前の1995年度と、必修化される2004年度直前、そして、2007年度の情報に絞って合格者を今調査対象の人口に対する比率で表したものである。

英語教育が開始された95年度に比べ、小学校では4～5級、中学校では3～準2級、高校では準2～2級が大幅に増加している。その一方、中学校では4級合格者が、高校では3級合格者数が減少しており、文部科学省の指標に沿った級を受験し、進路に有利とならない下の級は受験しなくなっている傾向が見られる。

回答者の小学校時代が「fun 中心」の授業であったことや、小学校英語の有益性を余り感じていないというアンケート結果が出ているにもかかわらず、学力向上につながったことが示された。

これは、導入そのものが世の中に影響を与え、結論として全体の英語力を上げることに繋がったと考えられる。2011年からの小学校外国語活動の必修化や高校での英語のみでの授業の導入によって、今後、より英語力の向上と低年齢化が進むと考えられる。

5.2.3. 検定を巡る今後の課題

ここで今後の学力測定方法が課題となる。言語能力は、文法能力+社会的知識+談話能力+

表2 学校種ごとの英検合格率推移（対象年齢人口に対する合格者比率）

学校種	年度 \ 級	2級	準2級	3級	4級	5級
		95/96	0.00%	0.00%	0.02%	0.08%
小学校	01/02	0.00%	0.02%	0.04%	0.20%	0.71%
	07/08	0.01%	0.02%	0.11%	0.46%	1.19%
中学校	95/96	0.01%	0.06%	3.95%	7.33%	2.57%
	01/02	0.02%	0.34%	5.69%	4.85%	2.33%
	07/08	0.04%	0.99%	7.23%	6.04%	3.52%
高等学校	95/96	0.47%	1.98%	3.35%	0.84%	0.01%
	01/02	0.99%	2.99%	1.19%	0.04%	0.01%
	07/08	1.40%	4.52%	1.52%	0.06%	0.01%

方略的能力と言われている (Richards & Schmidt 2002)。実際、英検 2 級に合格するには、新聞記事、講義等での課題図書等で応用できる英語力が必要であると明記されている (日本英語検定協会 2007b)。子どもの発達段階や社会的知識に照らし合わせた場合、英語運用能力はあるが社会的知識等に不足する児童に、2 級合格は日本語で受験しても難しい事がうかがえる。今後、発達段階と社会的知識を考慮した検定が必要となろう。3.1. の Cambridge 英検では CEFR A2 レベルで、大人用のテスト (Key English Test) と子供用のテスト (Flyers) に分けて、発達段階を考慮して英語力が測れるようになっている。参考にする価値があるだろう。

6. まとめ：成果と課題

本研究は小学校英語を入れたことで中等教育段階での英語学習に対する意識や英語力に影響を与えるか否かを解明することを目的に、中高生の意識および学力面での調査研究を行った。その結果、成果と課題が浮かびあがった。

成果として、中高生にとって受験・教科など外的動機付けの要因が大きいこと、それと同時に、小学校英語導入が社会全体に影響を与え、学力向上につながったことが分かった。この 2 点は、制度や教育体制を整えて行くことの重要性を示している。

一方、課題として、意識調査で見られたように小学校英語に対する有益感の低さである。英語嫌いを作らないために「fun 中心」の授業をするという風潮を正す時が来たと考える。真のコミュニケーション能力 (5.2.3 参照) は「fun」だけではつかないという意識改革が必要であろう。これをどのように変えていくのか、それが今後の大きな課題である。

今回の調査は、地域・学校数とも限られている。この結果だけで全てを結論づけるのは危険である。しかし、小学校英語の導入が大きく学力向上に寄与したことを踏まえ、国策として良い授業・研究を進めていく体制作りによって、よりグローバル社会に求められる人材育成が期待できると考える。

<引用・参考文献>

- バトラー後藤裕子 (2005) 『日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの検証と提言』 東京：三省堂
- Council for Cultural Co-operation, Education Committee, Modern Languages Division Strasbourg. (2006). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge University Press. (吉島茂、大橋理江訳 (編) (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 朝日出版)
- 金沢市教育委員会 (2004) 『金沢の教育』 金沢：金沢市教育委員会
- 金沢市都市政策局 調査統計室 (1984-2009) 「統計データ 年齢別人口」 1995 年～2007 年分
2009 年 8 月 29 日検索 http://www4.city.kanazawa.lg.jp/11018/nenrei_menu.jsp
- 菅正隆 (2008) 「特別インタビュー 菅 正隆 文部科学省教科調査官に聞く」 『子ども英語』 10 月号 8-10 頁
東京：アルク
- 樋口忠彦編 (1999) 『小学校からの外国語教育』
東京：研究社出版
- 文部科学省 (2002) 「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想の策定について」
2009 年 8 月 26 日検索 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm
- 文部科学省 (2008) 「平成 19 年度小学校英語活動実施状況調査 集計結果」 2009 年 8 月 23 日検索
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm
- 文部科学省 (2009) 『英語ノート』 東京：文部科学省
- 文部科学省 (2009) 『小学校外国語活動研修ガイドブック』
東京：文部科学省
- 日本英語検定協会 (2007a) 『受験の状況』 [2009 年度] 第 1 回検定 級別一次・二次受験状況
2009 年 8 月 27 日検索 http://www.eiken.or.jp/situation/grade_new.html
- 日本英語検定協会 (2007b) 『試験の内容 2 級』
2009 年 8 月 27 日検索 http://www.eiken.or.jp/exam/grade_2/about.html
- 日本英語検定協会 (2007c) 金沢市受験および合格状況
1995 年度～2007 年度分 日本英語検定協会提供
- Oxford, Rebecca. (1990). *Language Learning Strategies*. Heinle & Heinle Publishers
- Richards, Jack C. & Schmidt, Richard. (2002). *Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*. Edinburgh Gate: Pearson Education Limited.
- 産経ニュース (2009) 『【日本の議論】 小学校の英語教育は必要か』 2009.5.24 18:00 版 2009 年 10 月 14 日
検索 <http://sankei.jp.msn.com/life/education/090524/edc0905241800000-n2.htm>
- University of Cambridge ESOL Examinations. (2004). *YLE: May 2004 Exam Report*. 2009 年 8 月 28 日検索
http://www.cambridgeesol.org/assets/pdf/resources/teacher/yle_examrep04_intro.pdf

- University of Cambridge ESOL Examinations. (2005). *YLE: May 2005 Exam Report*. 2009年8月28日検索 http://www.cambridgeesol.org/assets/pdf/resources/teacher/yle_examrep05_intro.pdf
- University of Cambridge ESOL Examinations. (2007a). *Cambridge English Young Learners Tests*. 2009年8月28日検索 <http://www.cambridgeesol.org/research/index.htm>
- University of Cambridge ESOL Examinations. (2007b). *YLE:2007 Exam Report*. 2009年8月28日検索 http://www.cambridgeesol.org/assets/pdf/resources/teacher/yle_examrep07_intro.pdf
- 米田佐紀子、村上好江、高田功、リンチ・ギャビン、前垣外紀三子 (2006) 「ケンブリッジ英検ヤングラーナーズテストを使って事例研究」『北陸学院短期大学紀要』第38号 241-255頁
- Yoneda S. & Lynch G. (2007). "How Much English Can Japanese Children Learn in their Six-Year English Education in a Japanese School? —Evaluation Using the Cambridge Young Learners Test" *5th Asia TEFL International Conference 2007, Pre-Conference Proceedings* (CD-ROM) pp.1-18.
- Yoneda, S., Lynch G., & Woods, C. (2009). "The Immediate and Long-Term Efficacy of Teaching English in Elementary Schools in Japan." 『北陸学院大学、北陸学院大学短期大学部 研究紀要』第1号 191-208頁
- 米田佐紀子、リンチ・ギャビン、ウッズ・クレイグ (2009) 「小学校英語教育がもたらした中高生英語力への影響と課題—金沢市内中高生へのアンケート調査と実用英語技能検定結果に基づく研究—」『第39回中部英語教育学会静岡大会』口頭発表 常葉学園大学 2009年6月28日